ZANGEKI

zero8

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＺＡＮＧＥＫＩ

【Ｎコード】
Ｎ３４１３Ｆ

【作者名】
ｚｅｒｏ８

【あらすじ】
時は戦時。諸国を放浪していた火鏡は、とある国で謎の美女、さやかと出会う。”黒の一”と呼ばれた男の物語が今始まる。

第一幕

「おんどりゃあぁぁぁっ！！」

激しい気迫と共に振り下ろされる一筋の斬撃。食らえば脳天から一刀の元に切り伏せられるだろうその刃を、火鏡（ひかがみ）　蓮夜（れんや）は半身に体を開くことでかわすと、目の前を通り過ぎる白刃の煌めきに眉一つ動かす事なく柄に手を掛け、鞘から抜き出す勢いをそのままに男の腹を横一文字に切り裂いた。

「ひぃぃぃぃぃ。」

声を上げる間もなく事切れた大将を見て、怯えを見せる山賊の手下達。先ほどまで”狩り”の成功を祝っていた事が嘘のように、どの手下も顔面蒼白である。

「ゆ、許してくれぇぇ、オラ達はただ頭の言う通りにしただけだ！欲しいものなら全部くれてやるから、どうか、どうか命だけはっ。」

「なら、てめぇらはそいつらに情けを懸けたのかよ？」

一歩一歩近づいて来る火鏡に手下の一人が恐怖で体を震わせながらも必死に命乞いをするが、火鏡の言葉に声を詰まらせる。彼らの後ろには荷車にもたれ掛かるようにして数人の男達が、その近くには衣服をはぎ取られ暴行を加えられたと見られる女の死体が転がっていた。

ここは斗樺（とか）の国へと続く山道の外れ。近年で急激に国力を増している斗樺へと稼ぎに赴むく行商人が増えたことにより、山賊まがいの者たちが徒党を組んで度々こうした被害を生み出していたのであ

る。

「どうした？何か言う事はないのか？ないのなら・・・・・。」

「くっ、死にやがれぇぇぇ！！」

殺気の篭もった火鏡の口調に己の死を悟った男は、顔を醜く歪めると懐（ふところ）から短刀を抜き出して襲い掛かろうとする。しかし・・・・・

一閃。

切られた男は自分に何が起こったかさえ理解できぬまま、首が飛び胴体が地面に倒れこむ時には死んでいた。

「くそっ、殺っちまえっ！！」

大将に続き仲間が殺されたことにより一斉に襲い掛かってくる手下達。それは未知なる恐怖への抵抗だったのか、それとも大多数なら勝てるかもしれないと思った傲慢さゆえなのか。

・・・・数分後。その場に立っていたのは火鏡ただ一人。周りには述べ二十人にも及ぶ山賊たちが、ある者は首を、ある者は胴を、四肢を切られて骸（むくろ）と化していた。

血に濡れた刃を一振りし鞘に収めると、火鏡は被害に会った者達を丁重に弔（とむら）いながらその双眸（そうぼう）を斗樺の国の方へと向ける。

斗樺の国でこれから待ち受けるのは果たして希望かそれとも絶望か・・・・・・。

時は戦時。戦う理由は個々なれど、己が武力で勝ち取るこの時代。

幾度となく繰り返された戦いは未だに終える事なく続き、犠牲となった人々の心から希望と平安を奪い去っていった。この物語はそうした者達の中から”黒の一”と畏怖され、讃えられた男の物語である。

「ほう、新羅（しらぎ）がやられたか。して、積荷の方はどうなった？」
「はっ。辛くも逃れきった手下どもにより無事城内へと運び入れてございます。」
「ふむ。しかし気に食わんな。たかだか一人の侍にやられ、おめおめと逃げ帰ってくるとは・・・・・・・・殺せ。」
「御意。」

無精ひげをなぞり鋭い眼光を光らせながら、斗樺の国の領主である鴻令（こうれい）は臣下の者にそう告げる。
弱卒なれば容赦なく切り捨てる・・・・それが鴻令の考え方の指針であった。斗樺の国が近年で急激に力をつけ始めたのも鴻令のこの冷酷なまでの姿勢にあったと言えよう。
圧倒的な武力により周辺の村や町を弾圧し搾取する。己の身内でさえも躊躇うことなく切り捨てる非情さと狡猾さを兼ね備えたその姿はまさに暴君そのもの。
臣下が立ち去った後、蝋燭（そうそく）の明かりで赤々と照らされた室内に一人佇む鴻令。
しばらく何かを考えるように俯く鴻令であったが、おもむろにその顔を上げると口元を歪ませながら笑い出す。

「面白い。まことに面白いぞ。久々に活きのある獲物が釣れそうだわ。くっくっく、ふっはははははは。」

笑う鴻令の表情に浮かぶのは愉悦のみ。これから先、鴻令と合間見えるのがどういう存在なのかこの時はまだ誰にも分からなかった。

「は～いはい。ちょっと待っておくれ、今出るから。・・・・・これとこれだね？合わせて２００全だよ。・・・え、高いって？馬鹿言っちゃいけないよ。これでも他の店に比べたら安い方なんだよ？お客さん、見るからによそ者だろう？ここで暮らしていくにはこれぐらいが当たり前なんだよ。ほら、買うのか買わないのかどっちなんだい。早くしておくれ。こっちは忙しいんだから・・・・・・・はい、確かに。またのご贔屓(ひいき)を。」

斗樺の国の商店街。人通りは多くはないがそれなりに賑わっている大通りを一人の女が歩いていた。齢(よわい)二十代前半といったところだろうか。すっと通った鼻筋に少し薄めの唇。髪は短めながらも手入れが行き届いており、スレンダーな体つきとしなやかな手足からは若者が持つ瑞々しい弾力のある肌が見え隠れしている。

だが惜しむらくはこれほどの美人が歩いているのに視線を止める者が誰一人としていないということだろうか。だがそれも仕方がないのかもしれない。女の着ているものが頭からつま先まで浅黄色の布地で覆われているのだから。かろうじて見るのは深く被った頭巾から覗く口元だけ。怪しく見えなくもないが旅人の格好と言うものは得てしてこういうものが多いため、今更問い詰めようなどと言う者は皆無に近い。

ふとその女の歩みが止まる。それはかすかな声音(こわね)。大通りの喧騒にかき消されてしまいそうなほど小さな声ではあったが、それでも女の耳には確かに聞こえた。

（助けて）

それはまだ幼い女子の声。今まさに危機に直面しているのだろう。その声には恐れや怯えといったものが多分に含まれていたが、それでも自身のあらん限りの勇気を振り絞って助けを求めていた。女はすぐさま身を翻(ひるがえ)し、大通りから脇道に逸れた小道へと駆け出して行く。

「いくらなんでも高いだろ、これは。」
「へ？なにかおっしゃいましたかい？」
「いや、なんでもない。じゃましたな。」

店主に別れを告げながら火鏡は、先ほどの買い物の時の会話を思い出していた。

（確かに高いとは聞いてはいたが、これじゃあそのうち餓死しちまうなきっと。）

余りの値段の法外さに驚きを通り越して呆れてしまう。粟や稗(ひえ)といった非常食でさえ他の国の三倍～五倍の値段なのだからこの国の情勢を知らない者からすれば目を疑うことだろう。斗樺の国に訪れてからこれと言って職を持たない火鏡にすれば、この国で生きていくのは困難極まりなく早々にどこか他の国へ立ち去るべきかとも考えてしまう。

しかし旅立つにしてもやはり資金や食料が足りない訳で・・・・ああだこうだとしきりに頭をひねりながら歩き続けるといつの間にか大通りからだいぶ逸れて別の通りに出てしまっていた。

「やばいな、迷っちまったか？」

どうにも自分には考えごとをしながら歩き出してしまう癖があるようで思わず苦笑してしまう火鏡。しかし、その通りの雰囲気を察するとすぐに顔から表情が消える。

”奴隷市場”

合法・非合法問わず人身売買が行われる場所。見世物かごに入れられた奴隷達は皆一様に同じような古着を着ておりその表情は暗い。ただ唯一違うところと言えば、奴隷の首に下げられた値段の数字だろう。値段の高いほうから順に肉付きの良い男（女）、子供、病人あるいは障害を持つ者と続く。
火鏡自身、こうした光景は他の国々でも見てきたがここまで堂々と売買が成立している場所はなかったはずである。しかしこの国ではそれが当たり前のように受け入れられていた。
思わず顔をしかめてもと来た道へと引き返そうとするが

ドン！

「うわっ。」
「っ。」
「きゃっ。」

振り返ったところで向こうから走ってきた二人組みとぶつかってしまった。それぞれ三者三様の声を上げる三人。火鏡と女（顔は分からないが）は一瞬ふらついただけで済んだが、女の手を握っていた少女はぶつかった衝撃で尻餅をついてしまう。

「すまない。大丈夫か？」
「どいてっ！！」

少女を気遣う火鏡に女は怒鳴ってそう言うと少女の手を掴み立ち上がらせようとする。

「おいおい。いったい」

なんなんだと言いかけて火鏡は女の後ろからやってくる男達に気づいた。

「はぁはぁ、手こずらせやがって。覚悟は出来てんだろうな?!!」

二人を追いかけてきたのであろう男達のうち一人がそう叫ぶ。火鏡が見るにその男達は奴隷商人の仲間なのだろう。どの男達も筋骨隆々のたくましい体つきだが、にやにやと笑いながら女を（特に少女の方を）見る目つきは同姓の火鏡でさえも嫌悪感を感じるものだ。その視線を真っ向に受ける少女は涙を眼に浮かべながら震える手で女の手を握りしめている。一方女の方と言えばこれ以上逃げ切れないと思ったのか、男達の視線から少女を守るように庇(かば)い立ち、右手に持った何か（火鏡からは見えない）を男達に向けて油断なく構えていた。

「覚悟? ふん、笑わせてくれるわね。あなたたちみたいな筋肉馬鹿に私が負けるとでも思って?」

「な、なんだとぉ!この女(あま)ぁ、とっ捕まえて二度とその口きけなくしてやるぅ!!」

女の凛とした口調に挑発された形で男達が一斉に襲い掛かって来たが、多勢に無勢である。男五人に対し女一人。力の差から考えても断然男達のほうが有利だろう。しかしそれは相手が唯の女であればこその話。

女は右手に持った何かを男達に向けて投げつける。それは白い羽を

つけた鋭い針状のもの。数十にも及ぶ数の針が男達の下へと飛来し、容赦なく突き刺さる。

「ぐあぁ。」

「い、痛ぇ。」

顔や胸など所かまわず刺さったそれに男達は思わず歩を止めるが、致命傷には至らない。針といってもたかだか十センチ程度のもの。投げたとしても二・三センチ刺されば良い方である。

牽制には効果的だがそれからどうするのか？と、火鏡が不審に思いながらも様子を伺っていると男達の様子がどうもおかしい。刺さった傷は大したことはないのに次々と男達が膝を着き倒れていくのだ。

「おい。何したんだあんた？」

「あら、あなたまだ居たの？・・・・・・ふ～ん。」

「な、なんだよ？」

「別に。道のど真ん中に突っ立っている馬鹿がどんな男か見てただけよ。それで何か用？」

「いや、だからあの男達に何をしたか聞いてんだけどな。ま、いいか。」

「聞かなくていいの？」

「ああ。どうせ神経毒か何かの一種だろ。あの様子じゃあ相当えげつない毒が塗ってあるようだが。」

火鏡の視線の先には地面に倒れた男達が泡を吹きながら白目を剥(む)いて痙攣している。

「へ～。よく分かったわね。・・・いいわ、特別に答えてあげる。あれはあなたの言う通り神経毒の一種よ。体内に入ったら一週間は碌に動けないんじゃないかしら？解毒剤があれば別だけど、私しか

知らないしね。」
「なるほどね。ああ、さっきはぶつかって悪かったな。それじゃ。」
そう言って立ち去る火鏡の行く道を女が塞ぐ。
「ちょっと待ちなさい。あなた見たところ侍らしいけどこの子を無事に家まで送るまで護衛してくれないかしら。」
「なんでだよ。俺が居なくてもあんたの実力からしたら余裕だろ。」
「あなたが邪魔しなかったらとっくに逃げ切れてたんだけど？なにより、あの神経毒はなかなか手に入らない貴重品なの。他にも方法があったけどこの子に血は見せたくなかったしね。さぁ、どうするの侍さん？か弱い女性を二人も置いて逃げるのかしら？」
「か弱いって・・・・んな訳ないだろうに。」
「何か言ったかしら？」
「わかった、わかったよ。俺が邪魔したのも事実だしその子を送り届けるまでは付き合ってやるさ。」
「理解が早くて助かるわ。」
不敵に微笑む女を見てため息が出る火鏡だったが、そんな彼をよそに女は少女に何かを話しかけるとさっさと歩いて行ってしまう。置いてきぼりになりそうになって慌てて追いかける火鏡。だがこの時二人は気がつかなかった。はるか後方で屋根瓦の上に伏せながら火鏡達を見ていた人影があったことに。
「・・・・・なんでついてくるんだよ？」
「あら、いけないかしら？」

女の子を無事に家まで送り返した（どうやら人攫いに攫われて奴隷として売られそうになったらしい）火鏡と女は家の者に謝礼としては十分な額の大金をもらいながら大通りを歩き宿屋へとやって来ていた。買うものも済ませたため後は宿屋で寛ごうとしていた火鏡だったが・・・・なぜか女が離れない。今だに浅黄の頭巾をしっかり被り顔を見せない女に着いて来られるのはどうにも気が抜けない。

「あのなぁ、護衛の役はもう果たしたし俺は用済みだろ？いつまでも顔の分からない女に着いて来られるのは迷惑なんだがな。」
「そんなこと気にしてたの？案外心配性なのね。」
（なにが心配性だよ、大きなお世話だ）

内心愚痴をこぼしながらそれでも何か一言言おうとした火鏡は、頭巾を脱いだ女の顔を見て面食らう。美しさもさることながらその意思の強さを感じさせる黒い瞳に思わず見とれてしまったのだ。

「そんなに見つめるほど美しいかしら？」
「べ、別にそんなんじゃないさ。ただ・・・・」
「ただ？」
「・・・・いや、やっぱりいい。」
「ふふふっ。可愛い。」
「なっ？！」

火鏡の狼狽振りが余程おかしかったのだろう。女はその笑みをいっそう濃くしていく。
その笑みを見て、からかわれていると思いなんだか悔しくも感じたが火鏡とて伊達に諸国を放浪していた訳じゃない。会話の駆け引きなら何度も経験してきたしそれなりの自負も持っている。まぁ、この女相手には分が悪いようだが・・・・それはともかく、ここらで

一矢報いねば侍の名折れだろう。

「・・・その瞳だよ。」

「えっ？」

ぽつりと言った一言に女の注意が向く。そこには真剣な眼差しで女の顔を見る火鏡の姿があった。

「あんたは確かに美しい。男なら誰もがその美貌に釘付けだろう。けど俺はあんたのその瞳に惹かれたんだ。ここいらの奴はみんな死んだ魚のような目をしているのにあんたの目は違う。輝いているように見えた。内心はどうあれ意思の強さってのは目に宿るもんだ。俺はそういう強い意志を持った奴は嫌いじゃねぇ。うん。あんたは十分綺麗だよ。」

「えっ、あっ、な、何を言ってるのよ。」

火鏡の畳み掛けるような、それでいて誠実さの篭(こも)った褒め言葉が効いたのか、今度は女が動揺する番だった。火鏡に悟られないよう顔には出さないようにしているのだろうが、赤く染まった頬が何よりの証拠である。

「ぷっ、あっはははは。」

「あっ、からかったわね？！」

「いや、だっておま、くっくっく。」

「もうっ、仕方ないわね。ふふふっ。」

お互いに笑いあう二人。最初こそ気まずいものもあったけれど、いつの間にか二人の間には心地よい雰囲気が流れていた。そう、それはまるで気心の知れた相棒のように。この二人ならばどんな困難にでも打ち勝つことが出来るだろう。

「あっはははははは。」
「いつまで笑ってるのよ。この馬鹿っ！！」
「あうちっ！」
「まったく、乙女心をなんだと思ってるのよ。」

・・・・・・・・たぶん。

「そういえばまだお互い名乗ってなかったわね。私は鈴峰（すずみね）、鈴峰さやかよ。」
「俺は火鏡　連夜だ。よろしくな鈴峰。」
「さやかでいいわ。その代わり私も連夜って呼ばせてもらうから。」
「わかった。改めてよろしくさやか。」
「ええ、よろしくね連夜。」

お互いに握手をしながら（火鏡は頭を抑えていたが）呼び合う二人。部屋が向かい側だということで鈴峰が出て行った後に残された火鏡は、旅の疲れもあったのか畳の上に寝転がるとそのまま寝入ってしまった。

草木も眠る丑の刻。うす雲架かった月の晩。誰も彼もが寝静まり、獣や森のざわめき以外夜の静寂を破るものはいない。
そんな静かな夜の中、幾つもの陰が闇に紛れるかのように蠢（うごめ）いている。否、それは人。俗に忍び装束と呼ばれる黒い衣に身を包み、獣

の如く目を光らせて縦横無尽に地面を屋根を飛び、駆ける。
そしてある所で立ち止まった。

「ここに間違いはないのだな？」
「はっ、例の手下どもから聞いた人相とよく似た侍がこの宿屋に入るのを確認しました。あの女も一緒です。」
「・・・・お前達は侍を、わしは女を始末する。よいな？」
「「「はっ。」」」

その返事とともに男達は行動を開始した。

”殺気”それは読んで字の如く、人を殺そうとする気配のことである。しかし、どれだけ人殺しの技を身につけようとも相手に気取られないようにするのは難しい。特にそれがその道の者を殺そうとするならば。

「ぐぇっ。」

それは丁度、忍びの一人が短刀を振り下ろそうとした時だった。喉元に突き刺さるように当たった刀の鞘。一瞬にして数秒程だっただろうか、周りに動揺が走ったのを見逃さず鞘を引き戻す。仰向けの状態から足のバネと腹筋を使い後ろにバク転するとしゃがんだ状態のままで火鏡は敵対者と向かい合っていた。

「なぜ俺を狙う？」

問いかけるも応答は無い。敵の数は三人。残る一人は先ほどの鞘当

てで気管が潰れたのだろう、血を吐きながら死んでいた。
火鏡の実力に警戒心を露わにする男達。それぞれ短刀やクナイを構えながらじりじりと火鏡を取り囲むようにして近づいてくる様は、一気に三人がかりで殺そうとする腹積もりなのだろうか。
（ちっ、少々やっかいだな）
大刀一本。長い間諸国を歩き回り共に危険を乗り越えてきた愛刀ではあるが、こういった狭い室内戦闘では縁や梁に邪魔され上手く動けない。
そのことを経験でよく知っている火鏡は舌打ちするも、取り囲んでいる三人のうち左側の男に走り寄る。
男は火鏡が自分の方に走り寄ってきたのに合わせて短刀を突き刺そうとする。この場合、抜き身の短刀を構えている者と鞘に入ったままの大刀を腰に挿（さ）している者とではどちらの間合いが広いかは言うまでもないだろう。

だが思い出して欲しい。

山賊の大将（新羅）やその手下達を討ち取ったときの事を。

其の者は

「ぐわっ。」

渾身（こんしん）の一撃をかわせる程の回避術に長け

「ごふっ。」

大多数の戦闘にも勝ち得る程の

「ぎゃあっ。」

抜刀術の達人なのである。

一方こちらは火鏡が襲われていたその向かい、鈴峰が寝ている部屋である。
寝静まっているのか物音一つしないその部屋に忍びの男は立っていた。見下ろす先には鈴峰が寝ている布団がある。侵入してきた男に気づいていないのか、かけ布団に潜り込んだまま動く様子がない。
枕元から見える黒々とした髪が部屋の窓から差し込んだ月明かりに照らされて光沢を放っている。
男はしばしの間黙ってそれを見ていたが、おもむろに腰から短刀を抜き出すと鈴峰の胸元めがけて振り下ろした。

ズブリっ！！

突き刺さった刃の根元から赤い粘着質の液体がドクドクとこぼれ出し、布団を真っ赤に染め上げる。

「がはっ。」

燃えるような熱さと共に痺れにも似た痛みが全身を駆け巡る。だが・・・・・

「な、なぜっ。」

男は不思議で仕方がなかった。それもそのはず、刺し殺したはずの相手が自分を刺しているのだから。

「あらあら、幻(げん)じい様ともあろう者がこのくらいの事で不覚を取るなんて。里を裏切ってから腕が落ちたのかしら？」

妖美に微笑みながら、それでもその目は寒空の月夜のように冷たく男の横顔を見つめる鈴峰。

「ぐっ。」

脇腹に刺さった短刀を強引に引き抜くと、幻じいと呼ばれた男（火(ひ)野倉(のぐら)　幻三郎）は、鈴峰と距離を取り、痛みで顔を歪めながらも鈴峰を睨みつけるように見据えた。

「き、貴様は誰だっ！！」

「顔も忘れたって言うの？幻じい様ももう歳だし痴呆症の気(け)でもあるのかしら。」

「わしは貴様を殺したはずっ。」

「ああ、これ？」

鈴峰は短刀が突き刺さり、真っ赤に染まった布団のところまで近づいていくと掛け布団を引き剥がした。

「なっ。」

火野倉はその光景に驚いた。布団の上で寝ていたのは傀儡(くぐつ)。そう、鈴峰と等身大の人形がそこに横たわるようにして寝ていたのだ。

「驚いた？髪は動物の毛で編み、体は綿を詰めた特殊な樹脂。血の

方はある植物の根を濾したものから出来てるの。まぁ、女の一人旅は物騒なことばかりだしこれぐらいは準備して置かないとね。」

事も無げに淡々と説明しながら傀儡を回収する鈴峰。脇腹を刺されたとはいえ火野倉はまだ戦意を失っていないのにも関わらず、それをまるで意に介していないかのように振る舞う鈴峰はある種異様であった。

「ま、待てっ！」

「・・・・なにかしら？」

傀儡を回収し終え、向かい側から悲鳴が上がったのを聞き素早く部屋を出ようとする鈴峰に声をかける火野倉。

「なぜ、わしを殺さん？」

「殺す？取るに足らない老いぼれをなぜわざわざ殺さなければならないのかしら？」

「なんだとっ？！貴様ぁ！！」

「・・・・それにあなた、もう死んでるわ。」

「どういう意味・・・・ごぼっ。」

鈴峰の言葉が届くやいなや、口から尋常ではない程の血が溢れだし、体中の筋肉が弛緩してうつ伏せに倒れる火野倉。刺し口から感染した毒が急速に体内に広がり、呼吸器官や消化器官を内側からじわじわと溶かしていく。

「楽には殺さない。せいぜい死ぬ間際まで自分の犯した罪を味わいながら死になさい。」

血の池に沈みながら苦悶の表情に染まった火野倉の目に映ったのは、

鈴峰の、かつては同じ里で暮らした者の、憎しみと侮蔑(ぶべつ)が織り混じった視線であった。

「ふぅ〜、まったく何者なんだこいつらは。」

刀を納め事切れた忍び装束の男達を見渡す火鏡。

「私の敵よ。」

火鏡が振り向くとそこには鈴峰が、いつ着替えたのか忍び装束の姿で（くの一用の忍び装束。半そでで色は黒。両肩に赤い二重線が入っている）立っていた。その目は事切れた忍び達に向けられている。

「はっ？って、さやかその格好は・・・。」

「話は後。取り敢えずここから離れましょう。」

「ちょっ。お、おい。」

火鏡の呼びかけもなくさっさと宿を出て行く鈴峰。火鏡はそんな鈴峰に困惑しながらも後を追うのだった・・・・。

設定（補足説明）

火鏡　蓮夜：対多流剣刀術”群雲（むらくも）の舞”の免許皆伝者。抜刀術に天賦の才を見いだし、抜き身の戦闘でも圧倒的な強さを誇る。

群雲の舞：創始者以外習得不可能とまで言われた唯一無二の剣刀術。創始者である神楽　命は火鏡に免許皆伝のための極意を教えた後、他界した。

斗樺の国：日本がまだ中国大陸と繋がっていた時代に存在した小国。

第一幕（後書き）

作者：読者の皆様方、お久しぶりです。ｚｅｏ８です。忘れてる方もいらっしゃると思いますが、私はまだ生きてますよ。かろうじてですが（汗）。

さて、今回投稿させて頂いたＺＡＮＧＥＫＩ第一幕いかがでしたか？作者的にはリハビリがてらに短編小説として書いていたつもりだったのですが、いつの間にか増えてました（笑）。

調子の出ているときって本当に怖いですね。書けないときは一行も書けないと言うのに・・・・（涙）。

まぁそんなことはさておき、この小説は全三幕の予定でお送りしたいと思います。なにせ、もとが短編小説の予定でしたからね。

さぁ、次の幕で取り上げるのは鈴峰さやかの過去（予定）についてです。

更新速度はまったりと、ですが出来るだけ早く更新できるようにしたいと思います。では、また次回。

第二幕（前書き）

読む前に少しご注意を。この話には過激な描写や言葉が使われていますので（主にセクシャルハラスメントに付随する）、そういった表現に嫌悪感を抱く方は読まない方がいいと思います。注意するほどのものでもないとは思いますが、一応のほど。

第二幕

宿屋から離れた鈴峰と火鏡は奴隷市場の裏の奥、古びた廃屋(はいおく)のある場所へと来ていた。
囲炉裏に火を灯し腰を下ろす二人。だが二人の間に会話はなく、お互い無言のままゆっくりと時が流れる。

パチリ。

囲炉裏にくんだ木炭が音をたてて真っ赤に割れる。

「・・・・ねぇ、何も聞かないの？」
「別に。話したくないことなら無理に聞くこともない。」
「殺されそうになったのに？」
「命を狙われそうになったことなんて今までにもあった。こういう稼業をしてたら特にな。」

火鏡はそう言って刀を軽く叩いてみせる。

「そう・・・・。」

パチパチと囲炉裏の中で木炭が燃えるのをしばらく見つめる鈴峰。

「わたしはね・・・・。」
「んっ？」
「私は捨て子だったの。」
「・・・・そうか。」
「ええ。それで・・・・・。」

囲炉裏の火に当たりながらぽつりぽつりと鈴峰は語りだす。自分にとって忘れない、いや、忘れる事など出来ないあの忌まわしい惨劇のことを。

～五年前、八幻（はちげん）と呼ばれた里で～

「また腕を上げたな。さやか。」

丸太に突き刺さったいくつものクナイを見ながら、八幻の頭首、八幻　六郎太は賛辞の言葉をかける。

「有り難うございます父上・・・・ですがまだまだです。」

頬を上気させ、こめかみに汗を流しながらさやかは次の一投を丸太めがけて放った。

かっ！！

小気味良い音とともに丸太に刺さるクナイ。すでに丸太には亀裂が走り、何十本と刺さったクナイによって今にも砕け散りそうになっている。

「投術に関しては一人前だと思うがな。あとは・・・・・・。」

穏やかな表情から一転、真剣な表情になる朗々太。その雰囲気にただならぬ気配を感じたさやかは思わず緊張してしまう。

捨て子だった自分を育ててくれ、八幻の名を語ってはいても所詮は血の繋がっていない他人の子である。里の者と打ち解けあい、役に

立とうと必死に鍛錬はしていたがやはり邪魔だったのだろうか？いや、己の父である六郎太がそんなことを思うはずはない。ならば、里の長老たちにでも何か言われたのだろうか？
六郎太がに何も言わずにいるためにさやかの心はどんどん不安になっていく。
互いに見詰め合う二人。
片方は真剣な表情でもう片方は不安げな表情で。

そしてついに六郎太の口が開かれる。

「色香が足りないな。」
「・・・・・・・・はっ？」
「いや、父としては訓練するのもいいがもう少し体の方をな？栄養を十分に取れば大きくなると思うし、この際訓練するのは置いといて栄養を取ったらどうだ？うむ。そうだ、そうしよう。」

勝手に自己完結する六郎太。その視線はいつの間にかさやかの胸のあたりを凝視している。育ての親からそんなことを言われるとは思いもよらなかったさやかは「なっ、なっ。」と言うべき言葉がまとまらず赤面するしかない。その間にも六郎太の視線は胸から腰へと徐々に下がっていく・・・・・が、

「何やってんのよっ！！この変態っ！！！」
「げふっ！！」

背後から駆け寄ってきた人物はそのままの勢いで六郎太の後頭部に飛び蹴りを放つ。思わぬ不意打ちを食らった六郎太。衝撃を留めることも出来ず、そのまま地面へと突っ込んだ。

「父に向かって何をするんだお前は？！！もう少しずれてたら（首

の方に）死んでたではないか！！」

地面に倒れながらも吠えかかる六郎太。どうやら先ほどの攻撃では死ななかったらしい。

「死んでもらって結構っ！！あんたみたいな変態は世の中の女性の害悪よっ。死になさいっ、この、このっ。」

「ちょっ、なにを、がふっ、や、やめないか、ごぶっ、や、やめて～。」

六郎太に更なる追撃を仕掛けるその人物は、その光景を呆然と見ていたさやかに向き直ると申し訳なさそうに

「ごめんね～、さやか。大丈夫だった？この変態オヤジになんか変な事とかされてない？もしもされそうになったらいつでも私に言うのよ？お仕置きするから。」

「は、はぁ。」

微笑みながら実の父である六郎太を変態呼ばわりするのはその娘である八幻　さなえ。止めとばかりに六郎太の後頭部を踏みつけるとさやかの手を取り「訓練はもういいから、家に帰ろ？」と言って歩きだして行く。

一人残される六郎太。その後なんとか復活はしたが、さなえから事情を聞いた六郎太の妻、静香の容赦のない説教（実力行使含む）に再び地の底へと沈むのだった。

「さやかの育ての父親って変態だったのか。」

火鏡の発言に顔を引きつらせる鈴峰。

「え、ええ。それだけじゃなくてね。娘の成長を確かめるとか言って風呂場を覗いたり、触ってきたりしたのよ。それも私ばっかり。」

「変態の極みだな。」

「・・・そうね。でもその後、母上やさなえ姉様が私の代わりに怒ってくれたわ。もちろん実力行使でね。」

「例えばどんな？」

「覚えている限りだと、一日中狼や熊がうろついている山の木に逆さ吊りにしたり、クナイの練習台として子供達に提供したりとかね。他にももっと凄いことをやっていたらしいどあまり覚えていないの。」

「そ、そうか。いやそこまで聞けばもう十分だ。」

小屋の中は暖かいのになぜか冷や汗が流れる火鏡。六郎太に対するお仕置きについては自業自得とも言えないが、よくそれで生きていたなと激しく疑問に思うのだった。

それから数ヶ月後・・・・・。

「逃げるよ、さやかっ！！」

「はいっ！」

鬱蒼と茂った森の中をさなえとさやかは木々の合い間を飛び移りながら、自身の最高速度で里までの道を逃げ帰る。

”大名暗殺”

それが彼女らが受けた忍務であった。国の重役から依頼を受けて暗躍する八幻一族。その忍務内容は要人暗殺や諜報活動など多岐に渡るが、その中でも要人暗殺というのは対象者の身分によって難易度が変わる。
市民、町人は比較的簡単だが、武家や商家からは難しくなり、大名クラスともなれば警護の厳重さもあってか成功する確率は低く、またそれに対して捕えられ拷問を掛けられたり殺されたりする確率の方が高い。

しかし、彼女らは成功した。

くの一の持ち味は身体能力の高さでもなく、殺傷能力の高い武器でもない。その色香にある。その点ではさなえに勝てる者は里のどこにもいなかった（ちなみにさやかも奇麗ではあるがまだまだ色香が足りないとのこと　六郎太、談）。
二重まぶたにすっきりとした鼻筋。肌は雪のように白く、唇は薔薇のように赤くふっくらとしている。少し高めの長身ながら豊満な胸と肉付きのよい腰つきは、艶（なま）かしい空気を醸（かも）し出していた。

そんな極上の女が遊女の格好をして自分を誘っているとしたらどうだろう？

少なくとも標的の大名の男はすぐに自分のものにしようと、またその身を貪（むさぼ）るために夜伽をしようと考えた。屋敷に招き、さっそく夜伽の準備をする男。しかし、いくら護衛を厳重にしようとも自分の情事を他人に見せたくない男は、人払いをしてから行為に及ぼうとする。
そこが狙い目だった。

「あん。もう手が早いったら。」

男は着物をはぎ取ると、裸になったさなえを押し倒しそのふくよかな乳房を鷲掴みにする。手のひらに吸い付くような乳房のやわらかさに興奮したのか、片手でもみ続けながらもう片方の乳房にむしゃぶりついた。

「あっ、あっ、ああっ。いやっ。」

男の激しく責め立てる手や口づけに感じているかのような声を上げるさなえ。しかし、そこから次の行為へと進もうとして男の様子がおかしくなる。激しく乳房を揉みしだいていた手が震えだし、口からは涎(よだれ)が溢れ落ちる。

そして、顔がどす黒く変色する頃には体中から汗を噴き出して息を引き取っていた。

「残念。もう少し楽しませてあげたかったけど、私、あんたみたいな人好きじゃないのよね。」

ばさっっと着物を羽織りながら、さなえはもう死んでいる男にそう告げる。

「さやか、終わったわよ?」

「こっちも終わりました。」

さなえが屋敷から出て来るとそこには、クナイを頭から生やした護衛が数人倒れており、さやかがその向こうでさなえを待っていた。

「やるじゃない?いつ見てもさやかの腕は冴えてるわね。」

「いえ、さなえ姉様こそ。」

互いに褒め合う二人。しかしそこで運悪く市中を巡回していた警吏(けいり)に見つかってしまう。
ピリィィィィィィ。
惨状の有様を見た警侍が持っていた木笛を鳴らす。そのけたたましい音を聞きながら、さなえとさやかはここに用はないとばかりに一目散に逃げ出した・・・・。

「あら？灯りがついてるわね？」

最初に異変に気付いたのはさなえだった。彼女らが向かう先には八幻の里があるはず。ならばなぜこんなに遠くからでも灯りがみえるのか。忍びという稼業はいかなる情報も決して他人に漏らしてはならない。自身の死体でさえ敵方には有利な情報となるのだから里の居場所など尚更のことである。
その時、ふとさなえの脳裏に浮かんだのは、数日前里の会談から帰ってきた父が呟いた言葉。

「火野倉のじじいめ。国を替えるだと？ふざけよって！」

それは唯の愚痴だったのかもしれない。しかし、その時に盗み見た深刻な表情をした父の顔はなぜか忘れることが出来なかった。
まさか・・・・・嫌な予感がする。

「さやか、急ぐよっ！！」
「は、はいっ。」

焦燥感に駆られながら先を急ぐさなえ。さやかはそんなさなえに戸惑いつつも必死に後を着いて行く。

時は遡(さかのぼ)り、さなえたちが忍務に赴いた後の八幻の里で。

「なにっ！！火野倉が謀反(むほん)を起こしただとっ！！」

「はっ。密偵からの情報によりますれば、火野倉率いる手勢は千五百のこと。」

「千五百っっ！！いったいどこにそんな戦力があったというのだ。」

「詳細は分かりませぬが、どうやら火野倉の後ろで此度の戦を仕掛けた者が居るようでございます。・・・・・・どうなされまするか、八幻様。」

六郎太の側近が尋ねて来るが、もはや結果は分かっていた。里の者全てを集めてもせいぜい三百程度。戦に応じれば勝てる要素など皆無。いくら策略を巡らそうとも負けるだろう。ならば降伏か、撤退か。

「・・・・・・戦いたくない者は逃げるよう伝えよ。わしはここに残る。」

「「「八幻様（殿）っ？！！」」」

六郎太の発言に驚く側近や会談に集まった者達。続いて異議を唱えようと口を開こうとしたが、六郎太の表情を見て口を噤(つぐ)む。その視線の先には目を閉じうっすらと微笑む六郎太。

”この方はすでに覚悟を決めている”

そう悟る一同。その様は顔が沈む者、己の不甲斐なさに腹を立てる者、謀反を企てた火野倉に増悪の表情を浮かべる者など色々だ。だが一様にして同じなのはその思い。

里を愛し、皆を愛し、この暮らしを守ってきた頭首である六郎太をこのまま死なせてなるものか、と。

「・・・・良い機会だ。火野倉のくそじじには八幻の恐ろしさたっぷりと味あわせてくれる。付き合ってくれる者には悪いがその命、わしに預けてはくれぬか？」

「「「「はっ。」」」」

結果から言えば里の者は一人も逃げ出すこともまた降伏することもなく、その命を散らして行った。だが、その鬼神の如き戦う様は千五百の火野倉勢を怯えさせ、三百の命を代償に敵方千二百人を道連れにしたという・・・・・。

「そ、そんな。」

里に着いたさなえとさやかは自分の目に映るその光景が信じられない。忍務に赴く数日前まで見慣れた光景が今は無惨にも荒らされ、燃えている。周りには里の者や敵方と見られる足軽・雑兵たちが所狭しと倒れていた。

「取り敢えず、家に戻りましょう・・・・・。」

流石というべきか。まだ動揺しながらも事態を知るべく自分達の家に向かう二人。家に向かう間、彼女達の目に映るのは住み慣れた里の痛々しい傷跡だった。

「父上っ！　母上っ！」

二人の声が空しく響き渡る。八幻の家はことごとく潰されていた。支柱は倒れ、屋根瓦は散乱し、積み重なった木材が燃えている。

「・・・・さ、さなえ・・・・さやか・・・・・・・。」

「「母上っ！！」」

木々の隙間に挟まるようにして朗々太の妻、静香は生きていた。だが、その額から流れる血は致命傷であることを示している。静香に駆け寄る二人。涙が溢れ、その表情は悲しみに染まる。

「・・よく、聞きなさい。この戦を招いたのは・・・・・火野倉よ。私も夫も・・・必死に戦ったけれど・・・・だめね、あなた達を守って上げられなかった・・・・・だからせめてあなたたちだけは・・・・生きて・・・・・これを・・・・・・・・・ご・・めん・・・ね・・・・・・。」

途切れ途切れに言葉を呟く静香だが、最後に謝りながらそのまま事切れる。その手には黒光りする一振りの長刀が握られていた。

「なぜ、その刀を使わなかったんだ？」

「使わなかったのではなく使えなかったのよ。」

その刀、鈴峰の話によれば、黒刀”八幻華(やげんか)”は代々八幻一族の頭首に継承されてきた。しかしそのあまりの切れ味の良さに現頭首である六郎太が、余計な思想を生み出す輩を排すために刀の鯉口を溶接し秘密裏に隠したのだそうだ。ちなみにこの戦を引き起こすきっかけを作った火野倉も八幻華を狙っていたと言われているが確証はない。

「それじゃあ、そのさなえと言う人と二人で今まで一緒に？」
「いいえ。私を助けるために・・・・死んだわ。」
「すまない。」
「いいのよ、気にしないで・・・・話を続けるわ。」

火鏡の言葉に表情を硬くしながら答える鈴峰。火鏡はすぐさま謝るが鈴峰に気遣われてしまう。話を続ける鈴峰の様子は表情には出していないものの、泣いているかのようだった。

「うっ、うっ。」
「・・・いつまで泣いているのよ。しっかりしなさい！」
「さなえ姉様こそ、うっ、な、泣いているじゃない、ぐすっ。」
「ば、馬鹿っ！！これは汗が目に入っただけよっ！！」

泣き崩れているさやかに指摘されるも、気丈に振る舞おうとするさなえ。だが両親を、故郷を一度に失った悲しみは深くどれだけ我慢しようとも涙は止まらなかった。しかし、いつまでも二人で泣き合っている訳にもいかないのは事実。己を奮い立たせるとさなえは刀を抱きしめるさやかの手を引いて歩き出した。

「おいっ、そこにいる女！止まれっ！！」

それは運が悪かったとしか言いようがない。彼女達が獣道を歩いて山道に出ようとしたところを八幻の里を滅ぼした火野倉の後発部隊に見つかってしまったのである。残り三百の内、火野倉ら八幻の裏切り者十二名は先に出ており、残るは足の遅い足軽・雑兵二百七十五名ばかり。

その部隊を率いる隊長格に見つかったのださなえは。そう、さなえだけ。さやかはまだ山道には出ておらずその体は木の幹に隠され、見えていなかった。

「・・・・さやか、逃げなさい。」

「えっ？で、でも、さなえ姉様はっ。」

向こうから隊長を含め数人の男たちがやって来るのを目の端に見据えながら、さやかがいることを悟られないように小声で話すさなえ。

「ごめんね、さやか。本当はもっと一緒に居たかったけれど、私の命運もここまでみたい。」

「うそ、そんなのうそっ！姉様が死ぬなら私も一緒に死・・・・。」

「さやか。」

その顔は相変わらず男たちを見据えていたが、その体からは殺気が溢れ出し、凍てつくような声がさやかに向けられる。

「あんたが死んだら、その刀を託した母はどうなるの？里を守るた

めに散っていった八幻の皆は？甘ったれるんじゃない。あんたはまだ生きなきゃならないのよ。里をこんなにした幻じじに仇を討つためにも、ここで無駄死ぬようなことがあれば私が許さない。・・・・分かったら早く逃げなさい。」

「・・・・・・・・・・・分かりました。」

泣き声を押し殺し、血は繋がっていなけれど、実の姉のように接してくれたさなえに背を向けながら森の中へと走り去るさやか。その背中を視界の端に捉えながらさなえは苦笑する。

（さやかに仇をとらせるなんて、私も焼きが回ったかな。でも、私の分も精一杯生きてよね。）

「うおっ。隊長！この女すごい別嬪ですぜ。」

「おっ。確かに奇麗だな・・・・よし、お前達これは俺のもんだ。下がってろっ！！」

「え～！！そんなぁ、それはあんまりですよ。せめておこぼれだけでもいただけやしませんかね？」

「ああったく。うるさいわ！そんなに欲しいのなら俺がすむまで待っていろ。」

近づいてきた男達がさなえの美貌に騒ぎだす。その顔はいずれもにやにやとしており、さなえの事を性欲のはけ口にしか思っていないのだろう。

「おい、女。俺たちゃあ、さっきまで戦をしててなぁ。気が高ぶってるんだ。悪いがお前の体で慰めてもらうぜ。」

そう言いながらさなえの方に手を伸ばして来る隊長格の男。しかし、その手がさなえに届く事はなかった。腰に差した短刀を抜き放ち男の手を叩き切るさなえ。切られた男は一瞬何が起こったか分からな

いようであったが、手を切られた事を理解し、続く痛みに悲鳴を上げる。

「気安く触るな、下種が。」

毅然(きぜん)とした態度で男達を睨みつけるさなえ。その視線と声に怯む男達。だがそう長くも続かない。彼らの後ろには二百人を越える兵達が近づいてきている。

それでもさなえは引かない、否、引くことは絶対にしない。実の妹のように可愛がってきたさやかを逃がすためならば己の身がどうなろうとも絶対に。

さなえは静香からもらったもう一つの物を取り出す。さやかは知らなかったが、静香が息を引き取る時にさなえだけにこっそりと手渡した物があった。

”禁薬”。それは小さな黒い丸薬だが、それもまた八幻の一族に代々受け継がれてきた物。おそらく父も使ったそれを口に含んで飲み下す。そして最後の別れとなるであろう妹に思いを馳(は)せて、さなえは声高らかに叫んだ。

「我が名は八幻一族頭首、八幻六郎太の娘、八幻さなえ!!此度の戦如何(いか)に負けようとも、貴様ら下種にそうやすやすと下ると思うなっ!!我が命に代えて、貴様ら全員、屠(ほふ)ってくれるっ!!!」

「その後、さなえ姉様がどうなったのかは知らないわ。」

話終えたさやかの顔は、やはり思うところがあったのか暗く沈んでいた。話し始めてからかなりの時間が経っており、囲炉裏の火は消えかけ、空はもう白みがかっている。

「ねぇ、蓮夜。」

「なんだ？」

「あなた言ったわよね。私の瞳は輝いているって。奇麗だって。でもね、それは間違いよ。私は復讐をするために今まで生き永らえてきたのよ。火野倉やその後ろで画策していた鴻令を殺すためだけに・・・・そんな私が奇麗な訳ないじゃない。」

鈴峰の顔に浮かんだのは自嘲の笑みだろうか。火鏡は何も言えず無言のままだ。

「火野倉は済んだし、後は鴻令って言う男だけ。蓮夜、あなたの腕前、じかに見たかったけれど残念ね。でも話を聞いてくれただけでもうれしかったわ・・・・・ありがとう。」

沈んだ雰囲気を紛らわすかのように明るく振る舞うと、火鏡に礼を告げながら廃屋を後にする鈴峰。後に残された火鏡は黙ったまま囲炉裏の火が消えかかるのを見つめていた。

斗樺城本丸。

「火野倉がやられたか・・・・・ふむ、ゴクっ。」

女中に酌をさせながら火野倉らがやられたことを聞く鴻令。新羅に続いて火野倉までやられたと言うのにその表情はいつもと変わらない。いや、口元を僅かに歪め目尻が下がっているところを見るといかにもうれしそうな表情をしているのが分かる。

「どうなされますか。新羅様や火野倉様が殺されたとあっては、部下に要らぬ動揺が伝わりますが・・・・・。」

「その侍はここに来るかのう？」

「は？」

「それにその火野倉を殺した女、さやかと言ったか。さぞかしわしに恨みを抱いていることだろう。ならば今夜にでもあだ討ちに来るやもしれん。」

「な、ならば早急に警護の準備をっ。」

「よいよい。せっかくの余興ではないか。やつらがこの城に着いたらわしの部屋まで通せ。この剣の錆びにしてくれようぞ。」

脇に置かれた”それ”を鴻令は掲げてみせる。全長三尺五寸あり、刃渡りだけで二尺、幅は一尺もある、通称”斬馬刀”と呼ばれる大刀である。名前の由来の通り、馬を切り殺すために作られた刀であるが非常に重く扱いにくい。

だが鴻令はこの刀をいとも簡単に軽々と扱うと、その刀を臣下に向けて不敵に笑う。

「さぁ、狩りの始まりじゃ。宴の用意をしておけよ。」

設定

八幻の里：鈴峰や火野倉らの故郷。五年前に火野倉の謀反に会い、その時の争いで八幻の里は廃墟となり頭首であった八幻六郎太及びその一族も滅ぶ。

鈴峰　さやか（八幻　さやか）：八幻の里のくの一。八幻が没した後、捨て子だった自分を我が子のように可愛がってくれた頭首一家や里の者達の仇を討つために、単身火野倉を捜す旅に出る。この時、十八歳。それから四年後。旅先で火野倉の所在を突き止めた鈴峰は斗樺の国に潜伏。一年もの間情報収集を行ない、火野倉の背後に鴻令の存在があった事を知る。

黒刀”八幻華（やげんか）”：代々八幻一族の頭首に継承されてきた名刀。刀身は鉄ではなく、特殊な鉱物から出来ている。長刀でありながら軽く、耐久性においても非常に堅固である。ただし、切れ味が余りに鋭く使い手を選ぶため、今のところこの刀を使えるものは居ない。刀の特徴として鞘の先端部分に銀で拵（こしら）えた八幻の紋様が施されている。

禁薬：八幻華と同じく継承されてきた丸薬で、調合方法は一切不明。この丸薬が受け継がれるとき一緒に伝えられる言葉がある。「汝、これ用いるときは、己の命を犠牲とし、また全ての理（ことわり）を持って、無に帰すんとす。」

具体的に服用者に対しどのような作用をもたらすかは説明を省くが、作用時間は個人体重の血液量に比例し、効果は鈴峰が火野倉を刺した時に用いた毒薬よりも強力な破壊力をもっていた事を記しておく。

第二幕（後書き）

作者：ただ今、最終話に向けて執筆中ですがここで少しインターバルを設けます（主に調子に乗りすぎた作者の精神衛生上のため）。
さて、第二幕いかがでしたでしょうか？際どい表現もありましたが、くの一という設定上避けられない部分もあり書かせていただきました。作者も色々と思うところがありますが、どうかご勘弁のほどを。
あと、感想があればぜひください（一話の話が長いのでスクロールするのが大変だとか、別に設定いらないから話をもっと書いてとかでも結構ですので）。もしかしたら第三幕に反映して第四幕（エピローグ的な）になったりする可能性もあります。
さぁ、次はいよいよ最終話（予定）です。鴻令との戦いに鈴峰は何を思い、どうするのか？火鏡の動向はこれ如何に？”黒の一”と謳（うた）われた理由が明らかになります・・・・・ってもう予想がつきますよね？（笑）

第三幕

斗樺城の城壁近く、月が雲に覆われ暗闇が静かに辺りを支配するこの場所に鈴峰は立っていた。忍び装束を身に纏った彼女の顔からは窺(うかが)い知ることは出来ないが、その胸中は様々な思念が荒れ狂う津波のように渦巻いている。

自分を実の子のように可愛がってくれた八幻の頭首である六郎太とその妻の静香、里の者達、そして命と引き換えに自分を逃がしてくれた姉のさなえ・・・・。

一夜にして全てを失った彼女の悲しみはその心を深く傷つけた。旅先で自ら命を絶とうと思ったことも一度や二度ではない。だがその度にさなえの言葉を思い出し、彼女は復讐を糧(かて)にして生きてきたのだ。姉を犠牲にしてまで生き延びた不甲斐ない己自身を、最愛の者達を奪っていった火野倉や鴻令を憎みながら。

五年の長きに渡り耐え忍んできたその思いは燃え滾(たぎ)るように熱く、人と接することが不器用であった彼女を冷酷に、残酷に、妖美に変貌させ、一人前のくの一へと成長させる。

ガシャリ。

鎖鎌が城壁の屋根に引っかかった事を確かめると素早くよじ登り城内へと侵入する。新羅や火野倉が殺されたことで城内の警護は一層厳しいが、鈴峰は迷う事なく鴻令の部屋へと突き進んだ。行くてを阻む者を隠れてやり過ごし、声を上げさせる事なく暗殺しながら一歩一歩近づいていく鈴峰。その後ろ姿にどこか哀愁が漂っていたのに気づく者はいないだろう。居たとしてもその男とはもう会う事もない。

いつの頃からか復讐を終えれば己の命を絶つと決めていた。一人でいることの寂しさに疲れ果てた彼女がそう考えるのは仕方がない

ことなのかも知れない。ただ彼女には死に行く前に一つだけ心残りがあった。それは例えどんな形であれ彼女の過去を、生き様を知る者がいてくれる事。知らされる立場の者からすれば迷惑な話だが、それでもなお知っていてほしかったのだ。誰にも知られずに八幻の里が人々の記憶から失われて行くのを彼女は黙って耐えることはできなかったから。

携帯していた水筒の水をふすまに流すと静かに戸が開かれる。他の部屋とは違い、その部屋には名工の手によって作られた一級品ばかりの品々が置いてあった。真新しい畳の上に置かれた装飾品は色鮮やかな色彩を放ち、微かに漂うお香の香りは部屋に居る者を夢心地にさせる。だがそのどれもが鈴峰の意識はおろか視線さえ逸らす事は出来ない。彼女が狙うのは鴻令の命ただ一つだけ。

「来よったな？」

「っ！！」

その部屋の奥、ぼんやりと蝋燭が灯す中現れたのは、この部屋には場違いなほど大きな大刀を携え全身に朱色の甲冑を身に付けた鴻令であった。

「・・・斗樺城の城主、鴻令殿とお見受けするがいかがか？」

「ふむ。その面構え、女にしておくにはおしいな・・・・・・・いかにも。わしがこの斗樺城の主、鴻令であるが何用か。」

「知れたこと。そのお命頂戴するっ！！」

堂々と笑みを浮かべながら見え透いたことを聞いてくる鴻令。そんな鴻令に対し殺気を漲(みなぎ)らせながら片手で短刀を引き抜くと、牽制用にと数本のクナイを鴻令めがけて投げ打った。その狙いは正確に喉を、腋を、関節をと、甲冑に覆われていないところに向けられている。牽制とは言うものの命中すれば致命傷になりかねないほどの攻

撃である。しかし鴻令とてただ者ではない。飛来してくるクナイの軌道を見極め最小限の動きで防ぎ躱していく。

「まだまだ甘いっ？！！」

全てを躱しきった鴻令が余裕を見せようと鈴峰の居たところに目を向けるが、代わりに視界に飛び込んできたのは白刃の切っ先であった。

金属同士がぶつかり合う甲高い音が室内に響き渡る。

「ちっ。」

仕留めるはずだった攻撃を塞がれた事に思わず舌打ちするも、その手を休める事なく次々と攻撃を仕掛けて行く鈴峰。

首元に袈裟懸けに振るう一合目。

片脇を下から突き上げるように切り上げる二合目。

大刀を持てないよう肘を突き刺す三合目。

鴻令を飛び越え背後に回り、遠心力を活かした両膝狙いの四合目・・・・。

次々と息も継がせぬ攻撃が返り討ちも恐れず繰り出されるが、そのいずれも大刀の横腹で塞がれていく。

「はぁ、はぁ、はぁ。」

「もう終わりか？ならば次はこちらからよ！！」

馬をも斬り殺すと言われた斬馬刀が横なぎに振るわれると、鈴峰の体が宙を浮きふすまに叩き付けられた。

「がはっ。」

口から血を吐き出す鈴峰。ふらつく体を支えながら直ぐさま立ち上がろうとするもその衝撃は半端ではない。今の攻撃で肋骨の何本かが折れたのか動くのも辛そうだ。

「火野倉を下したと言うから期待しておったのに・・・・・・八幻の生き残りも所詮はこの程度と言うことか。」

「ぐっ、黙れっ！！この期に及んで我が一族を愚弄するつもりかっ！！」

その瞳に憎悪の炎を灯らせながら鴻令を睨みつける。しかし、次の動作に鈴峰の体が追いつくことはなかった。

「なっ？！早っ・・・！！。」

一瞬で間合いを詰められると、片腕を斬られ吹き飛ばされる。先ほどの攻撃とは比べ物にならないほどの衝撃が激痛とともに体を襲い、障子を突き破って城内の庭へとはじき出された。その様を冷めた目つきで眺めながら血の付いた斬馬刀を振り払い肩に担ぐ鴻令。

「・・・・わしの武具を見るとどいつもこいつも動きが遅いと考える。先ほどの打ち合いで見抜けなかった貴様も八幻の一族同様、無様にその命散らすが良い。」

そして斬馬刀を庭先で倒れ伏している鈴峰に向かって振り下ろした・

・・・。

鈴峰が城内へと侵入を果たした丁度その頃、斗樺城の城門前では火鏡が門番の者に詰問されていた。

「貴様、こんな夜更けに一体何のようだ？」

「こちらの城主である鴻令様にとある用が有り、ご挨拶も兼ねてお会いしておこうかと思いまして。夜分遅くに済みませんがお目通り願えませんでしょうか？」

旅人の衣装を装い、いかにも行商人であるかのように振る舞いながら低い物腰で話す火鏡。だがそれに反して門番の男は厳しい態度を崩さない。

「それはならん。」

「なぜでございましょう？」

「今、鴻令様の命を狙う輩が潜伏していてな。侵入する機会を伺っているらしい。例えば・・・・・こんな夜に訪れる貴様のようになっ！！」

「うわっ！！」

門番の男が問答無用とばかりに突き出したその槍を危うくながらも回避した火鏡。

「いきなり何をするんですかっ？！」

「躱したか・・・・貴様ただ者ではないな？」

「な、なんのことでございましょう？私は、一介の行商人でござい

ます。とてもとても鴻令様のお命を狙おうなどとは思っておりませぬ故、どうかご勘弁のほど願えませんでしょうか？」
「とぼけるつもりか。貴様の言う一介に過ぎぬ行商人風情が先ほどの一撃を躱せるとでも？見くびられたものだなこの俺も。」
男はそう言うと胸元に掛けられた呼び子を打ち鳴らす。辺りに呼び子の音が響き渡るとそれに呼応するかのように城内が騒がしくなり、出るわ出るわ、総勢五十名にも及ぶ男達が刀や槍を携えて火鏡を取り囲むように集まってきた。

「逃げ場はないぞ。そろそろ正体を表したらどうだ？侍よ。」
「・・・・ばれたのなら仕方が無い。だが、お前もただの門番じゃないな？あの槍の一撃は足軽程度じゃ鋭すぎる。」
「流石だな。新羅を殺っただけのことはある。」
「新羅？」
「貴様が殺した山賊頭のことよ。鴻令様があいつの得る利益に目をつけてな、この国を大きくするためにひと働きしていたのよ。貴様が新羅を殺してくれたおかげで代わりに俺が後釜に据えられたが、まぁ、そのことに関して言えば感謝している。これで思う存分暴れられるってなもんだ。」
「なるほど。斗樺がどんな国かと思って来て見れば、弱者にたかる蛆虫どもの巣窟だったとは。胸糞悪くて反吐が出そうだな。」
「くっくっくっ、悪態付くのもそこまでよ。貴様はその蛆虫どもに殺されるんだからな・・・・殺れ。」
「「「おおっ。」」」

（自分が蛆虫なのは認めるのか？）

内心疑問に思う火鏡をよそに男の合図で一斉に襲い掛かってくる男達。それぞれ手にした武器の間合いが違うこともあるのだろうが、

鍛え方が足りないのか統率が取れているようには見えない。
火鏡は手前まで近づいてきた男三人に浅黄の布を投げつけると、腰から引き抜いた刀身を真横に斬りつける。だがその動きは止まらない。男達が絶命した後も剣を止めることなく振り続ける。死に体を狙う者達がいる集団戦闘では機動力こそが明暗を分けることを火鏡は熟知していた。
独楽のように舞いながら斬り崩し、相手の攻撃に逆らう事なく動きに合わせて捌(さば)ききる。全方位を攻撃範囲とするその攻撃は斬ることが主体であった。突きは死に体を誘うことから集団戦闘では相応しくないとされ、斬る事と捌く事のみに特化した流派、それが火鏡が扱う”群雲の舞”である。
群がる者どもをなぎ倒し雲の如く自由自在に動き回る事から名付けられ、その体現者で唯一の免許皆伝者である火鏡は、数年の放浪を経て自身の得意である抜刀術と組み合わせその剣術を更に一段と昇華させていた。

「ばっ、化け物めっ！！」
「ひぃぃぃ、に、逃げろぉぉ。」

二、三十人を斬り終えたところだろうか。火鏡の圧倒的な強さに恐れをなした一人が臆病風に吹かれ逃げ出すとそれに呼応するかのように他の者達も我先にと逃げ出していく。しかし逃げ出したその先に待ち構えるのはあの門番の男。

「鴻令様に従わない弱卒は切り捨てるのみ。」

男の手に握られた槍が大振りに振られたかと思うと、矛先から柄の中ほどまでを体に食い込まされる形で、逃げ惑う男達は骨が砕ける音と共に絶命していく。

「自分の仲間でも容赦なしか・・・・・。」

嬉々として槍を振るう男を見て不快そうに呟く火鏡。恐慌状態に陥った男達の冷静さのかけらもない剣筋を躱しながら、刀身で男の槍を受け止める。

「狙いは俺だろう。よそ見をするなこの蛆虫野郎。」

「ほう、俺を蛆虫扱いするとは良い度胸だな？」

「いや、お前自分で認めただろ。」

「・・・・・この俺の槍さばきその身を以て知るが良い。」

「無視かよ。」

「食らえっ！！」

突っ込みを入れる火鏡に槍を引き戻し、一気に突き出す男。少々間が抜けていると思われがちかもしれないが、その武力は本物。先ほどの一撃は様子見だったのかその槍の鋭さは段違いに早く、短所である突いた後の隙も切り返しやなぎ払いへと攻撃を変化させて無くしている。突き、突き、なぎ払い、振り下ろし、突き上げる。躱し続ける火鏡もたいした者だが、そのこめかみにはうっすらと汗がにじみ出るほどの猛烈な槍さばきである。

「そらそらそらっ、貴様の刀はお飾りか？躱しているだけでは俺の槍は防げんぞ！」

「・・・・・・」

火鏡が槍を捌くだけに徹しているのを見て、余裕が出てきたのか挑発まがいの言葉を投げ掛ける男。だがその言葉通り躱すだけでは限界があった。そしてついに男の槍が火鏡を捕えてしまう。

（くっ、重い！）

なんとか刀身で防いだもののその槍の勢いにふらつく火鏡。

「俺の槍を受け止めるとはなかなか・・・・・・だがその隙が命取りよ。」

男の顔が愉悦に染まる。続く第二撃を体勢を崩した火鏡が防げるはずも無い。横なぎに払った槍の矛先が体に食い込むように吸い込まれたこの瞬間、男は火鏡の体が胴体から真っ二つに切り裂かれるのを確信した。

ゴキンっ！！

その音は槍の矛先から振動するように男の手に伝わって来る。しかしその感触は体を切り裂くものでもなく、骨を砕く音でもない。

「な、なんだとっ！」

男の視線の先には体に食い込むはずの矛先が、いつの間にか握られていた刀の鞘によって受け止められている。

「今のはやばかった。後少し遅かったら死んでたな。」

「き、貴様。あの体勢から抜き出したのか？！」

「ああ。そうだが？」

事も無げに言い放つ火鏡を信じられないといった表情で見つめる男。体勢を崩された後を狙った渾身の一撃を鞘で受け止められるなど予想もしていなかっただけにその驚きは大きい。その隙を火鏡は逃すほど甘くはない。

「先を通してもらうぞ。」

その言葉に男が我に返った時には白銀が首筋を通り過ぎ、吹き出した血しぶきによって己の視界が埋め尽くされていた。

（冷たい）

鴻令に弾き飛ばされた後、転がるように庭先へと横たわった鈴峰。そのまま気絶してもおかしくない攻撃を受けた彼女が意識を手放さなかったのは僥倖（ぎょうこう）だった。頬から伝わる小石のひんやりとした冷たさが彼女の意識を確かなものへと変化させる。

「うぅ・・・・・っ。」

焦点の定まらない目をぎゅっと瞑（つむ）りながら起き上がろうと体に力をこめるもその途端に生じた激しい痛みに思わず呻く。斬りつけられた肩からは灼熱にも似た痛みとともに血がどくどくと流れ出ており、鈴峰の忍び装束をじわりじわりと濡らしていく。

・・・ザク・・・ザク・・・ザク・・・・

小石を踏み鳴らす足音が鈴峰のいる方へと近づいてくる。今更誰がとは問わなくてもわかるだろう。鴻令が止めを刺しに来たことはそ

の姿を見るまでもなく分かること。だが今の鈴峰にはもはや体中を駆け巡る痛みによって身動きすら取れない。到底、鴻令と再び対峙することなど出来ようはずもなかった。
足音がすぐ近くで止まると空気を裂く音が、おそらくあの大刀を振り下ろしたのだろう、頭上に響く。

（父上・・・・母上・・・・・さなえ姉様・・・・・ごめんなさい）

万感の思いが鈴峰の胸をよぎる。瞳からあれほど強く宿した意思の光が徐々に消え去り、心を絶望と後悔が満たしていく。最後に思い出されたのは自分が去っていった後の火鏡の後姿だった。

（蓮夜・・・叶うならあなたにもう一度会いたかった・・・・・）

ガッ！！！！

無慈悲に振り落とされる大刀の一撃。それは確実に鈴峰の命を刈り取る軌道を示していた。

しかし当たる直前で

「ぐあぁっ。」

鴻令の小さな悲鳴とともにその軌道をずらし

鈴峰の目の前へと突き刺さる。

（え？）

諦めて死を覚悟した鈴峰は何が起こったのか分からない。痛みに顔

を歪ませながら頭を上げると、すぐ目の前に立っていた鴻令が額を押さえながらよろめいている。その側に落ちているのは刀の・・・・・鞘。

「さやかっ。大丈夫か！」

鈴峰の耳にはっきりと聞こえるその声は彼女が再び求めた人のもの。続いて走りよって来る音が聞こえたかと思うと仰向けにされ背中に手が当てられる。

「あっ、ぐっ、うぅ。」

そっと優しく抱きかかえてくれた相手を確認すると、今この時に会えた喜びが鈴峰の心を暖かく包み込む。だがそれも続く痛みによって言葉にする事ができず呻く事しか出来なかった。火鏡はそんな鈴峰を気遣いながら思ったよりも状態が悪い事を知り深刻な表情になる。

（ひどい血だ。早く手当しないと・・・・）

怪我の方は治療すれば何とかなるかもしれない。しかし肩からの出血量が多すぎた。このままでは失血死に繋がる可能性も十分にあり得る。

「不意打ちとは味なまねを。この女が死に遅れたではないか。」

「・・・あんたが鴻令か？」

「そう言うお主は新羅や火野倉の手勢を殺した侍じゃな？」

気を取り直した鴻令が鈴峰を抱きかかえている火鏡を見下しながら、地面に突き刺さった斬馬刀を引き抜くとそのまま二人とも斬り殺す

勢いで振り下ろす。

「人一人抱えて避けるとはやるよるの。」

鴻令の一撃をぎりぎりで横っ飛びに躱すと静かに鈴峰を下ろし、抜き身の刀に持ち替える火鏡。時間はない。一気に決めようと鴻令の下へと疾駆する。

打ち合いは激しさを増し、火鏡も鴻令も少なからず手傷を負うがなかなか決着がつかなかった。一振りで旋風を巻き起こす程の斬馬刀を軽々と扱う鴻令に対し攻撃を捌いて受け流し隙を狙う火鏡。両者の早さはほぼ互角。ならば甲冑を着込んでいる鴻令がやや有利だろう。いかに火鏡といえど鉄で作られた鎧ごと斬ることは出来ないため、徐々に押されて行くのは目に見えていた。そして大振りに振られた斬馬刀が次に起こる出来事を運命づける。

バキィィィィィィンッッッッ！！！！！

不協和音を奏(かな)でながら刀身が空中を舞い落ちる。それは必然だった。もともと刀は鋼同士をぶつけ合うものではない。何かを斬るだけでも刃こぼれが生じ常に手入れをしなければならないのだ。火鏡の持つ愛刀も耐久力は高い方だが斬馬刀程の攻撃を防ぎきる事は不可能であった。

刀を折られれば侍は侍ではなくなる。刀は侍の命とも言うべきもの。それは火鏡とて同じだった。唯一の武器を失い焦る火鏡に好機と見たのか鴻令が体当たりを食らわす。

「ぐはっ。」

吹き飛ばされ鈴峰の近くに転がる火鏡。状況は絶望的だ。浅い呼吸を繰り返しながら頬を青白くした鈴峰と、刀を折られ鴻令に対抗す

ることも出来なくなった火鏡。今の二人が鴻令に勝ち得る事など万が一にもありえない。ならば残された道は逃げるしかないのだが・・・・

鈴峰を抱きかかえたまま鴻令から逃げ切れるのか？

答えは否。火鏡だけならばともかく重傷の鈴峰を連れて逃げ出されるほど鴻令は遅くはない。それは先ほどの戦闘で明らかだ。

ならばどうするか・・・・

「蓮夜・・・・あなただけでも・・・・逃げて・・・・」

思案にくれる火鏡に掠れがすれに声をかける鈴峰。その手には煙玉と紙切れが握られている。

その手を見つめながら火鏡はほんの一瞬呆然とするが・・・・やがて苦笑する。

助けに来た俺が逆に助けられる？

ははっ、なんの冗談だそれは？

周りを気遣う余裕もないくせに無理しやがって

そんな奴を置いて行ける訳ないだろうっ！！！

火鏡は受け取るとそのまま鈴峰を抱きかかえ煙玉を地面に叩き付ける。叩きつけられた煙玉は中に仕込まれた薬品を反応させ、一面に立ち上る白煙を撒き散らす。

「せっかくの獲物を逃したか。残念じゃ、後もう少しじゃったのに。」

今日は風も吹かずこの煙が晴れるまでには時間がかかろう。一人その場に取り残された鴻令は自身に巻き付く煙を見ながらぽつりとそう呟くのであった。

「追えっ！！！奴らをこの城内から絶対逃がすんじゃないぞっ！！！」

「はぁ、はぁ、はぁ、しつこい奴らだ。」

鈴峰を抱きかかえながらどのくらい走ったのだろう。額から大粒の汗を流し、肩で大きく息をしながら一息付く火鏡。すでに城門は閉じられ城外に出る事は出来なくなっていた。今居る場所は用水路近くにある馬小屋である。なんとかして脱出しなければここもいずれは見つかってしまうだろう。

「しっかりしろよさやか。もうちょっとの辛抱だからな。」

「ふふっ・・・蓮夜は優しいわね。」

肩の傷は腰紐を使いきつめに縛ったことで出血を抑えることは出来

たが、血を流しすぎたのか顔は相変わらず青白くその声は掠れて弱々しい。すでに手遅れである事は誰の目で見ても明らかだった。

「ねぇ・・・連夜。」
「なんだ？」
「なぜ私を・・・助けにきたの？あなたには・・・・関係・・・・ないことのに。」
「関係ない、か。確かにそうかもな。」

火鏡がため息を付きながらそう答えると鈴峰の瞳が微かに揺れる。頭では分かっていたつもりだった。互いに出会ってから数日とも経っておらず、旧知の間柄でもない。自分勝手に振る舞って悲惨な過去を語らい、都合の良いように利用しようとした相手でもある。そんな自分が彼に甘えるような言葉を期待するほうが間違っている。

「赤の他人だったらな。」
「え？」

自分の浅はかさを自嘲しようとした鈴峰に火鏡は笑ってみせる。

「言っただろ。俺はさやかを気に入ってるって。もちろんお前の過去を知ってもな。」
「迷惑・・・だった？」
「ははっ、そんな訳ないじゃないか。さやかが自分のことをどう思っているかは知らないが、さやかの目的が復讐だとしてもその根元にあるのは家族への純粋な思いだ。なら応援してやるのが俺の役目ってもんだろう？」
「・・・馬鹿ね。」
「ああ馬鹿かもな。」

互いに微笑む二人。残された時間は僅かでも今このときばかりはゆっくりと見つめ合うことができた。

「蓮夜・・・今から言う事・・・・良く聞いて。あそこにある・・・・用水路が見える？」

「ああ、見えるよ。」

「あの用水路は・・・・この城から脱出する経路の一つなの・・・・飛び降りたら・・・・壁際に取っ手があるから・・・あなた一人なら・・・・」

「さやか・・・・」

「・・・お願い。」

「分かった。」

「最後に・・・抱きしめてくれる？」

返事の代わりに背中を支えている手が持ち上げられるとやさしく抱きしめられる鈴峰。頭が垂れそうになったが、しっかりと覆い被さるように抱きしめられているためその心配も無い。冷えきった体にじんわりと火鏡の体温が伝わってくると自然と心が安らいでいく。

（あなたに会えて本当に良かった）

火鏡の耳元で囁（ささや）く鈴峰の顔は微笑んでいた・・・・・。

それからしばらく後、双眸から流れ出る涙を拭う事もせず火鏡は立ち上がる。その腕の中には離れることのないようにしっかりと抱きかかえられた鈴峰がいた。

「おい、見つけたぞっ！！」

「貴様っ、そこを動くなっ！！」

用水路を目の前にして背後から兵士達の声がかかる。歩みを止めて振り返る火鏡。正面から向かい合うことになった兵士達は火鏡の体から発散される濃密で巨大な気の塊に思わず息を呑んだ。”殺気”が具現化したらおそらく彼らは声を上げる事も出来ずに死ぬだろう。現にその気を一身に浴びることになった兵士の数人はその場で腰を抜かしている。

「鴻令に伝えておけ。次に会う時は斬馬刀ごと貴様のその面叩き斬ってやるとな。」

押さえ様の無い怒りを内包しながら火鏡はそう告げると用水路へ飛び込んだ。

それからひと月が経ち・・・・・

「鴻令様が御落命なされたぞ！下手人をなんとしても探し出せ！！」

城内の大臣から兵士たちに至るまで、主が人知れず殺されたことを知り大騒ぎである。けれどどれだけ探そうとも下手人の行く手は分からずじまいであった。鴻令の死に様を見た者はこう言い残している。

「あれは人の仕業じゃねぇ。あんなことが出来るのは鬼か妖怪の類だけだ。鴻令ってのはよほど恨みを買っていたんだな。おお怖い怖い。」

この後、急激に国力をつけていたはずの斗樺の情勢は大きく乱れ、山賊らの被害に遭い奴隷として扱われていた人々も解放された。しかしそれはまだほんの一部にしか過ぎない。斗樺の領土を奪おうと画策する諸辺の国々によって争いは未だに続いている・・・・。

「どうしても行くんじゃな？」

山村の奥深く古ぼけた山寺で、仏像を前に手を合わせる男に住職はそう問いかける。

「ああ。」

背中越しから聞こえるその声は言葉少なく小さかったがはっきりと男の意思を伝える確かなものだ。

「そこまで言うのならもう止めはせん。じゃがせっかく助かった命じゃ、無駄にするでないぞ・・・・・これを。」

そう言って住職が取り出したのは木箱に入った一振りの刀。

「何から何まで世話になるな。坊さん、この恩は必ず・・・・」

「老いぼれた儂にそんなもの必要ないわい。それにお主の恩なんぞもらったところで何にもなりゃせん。いつまでも畏まっとらんと早よ去ねや。それ、しっしっしっ。」

さも面倒くさそうに手を振る住職に、まったくあんたそれでよく坊主が務まるなとか思いながら苦笑し寺を去る男。その腰には八幻の紋様が入った鞘が封を切られ差さっている。

山道を中程までおりた時何かに誘われるかのように振り返る。その目に映るのは木々に隠された山寺が朝日を受けて光り輝く光景だった・・・・・。

第三幕（後書き）

作者：予定より投稿するのが遅れてしまい申し訳ありません。ふぅ～やっと終わった・・・・。
短編だったはずなのにここまで長くなるとは思いませんでしたが、完結した今では投稿して良かったかなと自惚れているｚｅｒｏ８です。ここまで読んでくださった読者の皆様本当にありがとうございます。次は他の作品でお会いできることを（主にクウガ戦記とか葬送術士とか）期待しつつこの辺で失礼したいと思います。では・・・・・。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3413f/

ＺＡＮＧＥＫＩ

2010年10月8日11時25分発行